

Juichi WAKISAKA Race Report

2013 AUTOBACS SUPER GT Round 6 -FUJI GT 300KM RACE-

◆◆ 僅差でポイント獲得を逃す悔しい結果に ◆◆

No. 39 DENSO KOBELCO SC430		
Drivers	Qualifying	Final
脇阪 寿一 / 石浦 宏明	12位	11位

開催日：2013年9月7日-2013年9月8日

サーキット：富士スピードウェイ（静岡県御殿場市、コース全長：4.563km）

レース距離：66周（301.158km）

入場者数：予選日19,500名、決勝日32,800名、合計52,300名

今シーズンの終盤戦に向け、いよいよ大詰めを迎える SUPER GT。第6戦の舞台となるのは、静岡・富士スピードウェイ。SC430 にとってはホームサーキットでもあり、また第2戦以来となるシーズン2度目の戦いの場となる。チャンピオンタイトルを意識した戦いになるのはもちろん、確実にチャンスを形にすることが求められる一戦となる。

予選日朝の公式練習では6番手につけた No.39 DENSO KOBELCO SC430 だが、午後からの予選に入ると Q1 でタイムアップのチャンスに恵まれず 12番手で終了。Q2 への進出は果たせなかった。

迎えた決勝。朝のフリー走行中はレインコンディションに、そしてレース中も気まぐれな雨が時折降るなど、不安定な状況下でしぶとく戦うことが求められた。しかしながら、セーフティカーの導入などまたもレースは荒れ模様。これを逆手に取り、上位争いに食い込みたいところだったが、前を行く車両との接触がドライブスルーパナルティの対象となり、万事休す。それでも粘り強く戦い、ポイント圏内で周回していたのだが、最終盤になって左フロントのホイール破損が原因によるスローパンクチャーで緊急ピットイン。惜しくも 11 位でレースを終え、ポイント獲得には至らなかった。



■ 9月7日(土)

09:00-11:00 公式練習

14:15-14:30 ハックアウト予選 (Q1)

15:00-15:12 ハックアウト予選 (Q2)

【公式練習】 6番手 / 1'33.612

事前に富士で行われた GTA 公式テストでも総合トップタイムをマークするなど、手応えを持って迎えた今回、朝の公式練習は気温 25 度、路面温度 29 度、灰色の空が一面に広がる薄曇りの中、午前 9 時からセッションが始まった。まずは石浦宏明選手がコースイン、クルマのフィーリングをチェックしながら周回を重ねていく。30 分ほど走って 3 番手につけた石浦選手がピットイン。セットアップの調整を行って再びコースへと向った。このあと、赤旗での中断を挟み、なおも石浦選手がドライブを継続。タイヤを替えてフィーリングを確かめるなど、精力的な作業が続いた。その後、21 周目には脇阪へとスイッチ。セットアップを確認し始める。

その後、GT300 の専有走行を挟んで GT500 の専有走行がスタート。ここでも脇阪がコースへと向い、午後からの Q1 を想定したシミュレーションを行うなど、次々とメニューを消化。加えてベストタイムとなる 1 分 33 秒 612 をマークし、6 番手で朝のセッションを終了している。



【ハックアウト予選 (Q1)】 12番手 / 1'33.434

気温 26 度、路面温度 32 度のコンディションで始まった予選、Q1。午後 2 時 15 分からのセッションではあったが、15 分間のうち、ちょうど半分の時間が経過した頃から次々と車両がコースへと向っていく。その中には No.39 DENSO KOBELCO SC430 のステアリングを握る脇阪の姿もあった。

気合を入れてタイムアタックに向った脇阪だが、A コーナー（コカ・コーラコーナー）に入った瞬間、リアが流れクリアラップを逃してしまう。気を取り直し、翌周には 1 分 33 秒 695 を、そしてさらにもう 1 周アタックを敢行。1 分 33 秒 434 までタイムアップを果たす意地の走りを見せた。しかしながら、タイムこそトップ 8 までわずかに 0.2 秒差ではあるが、ポジションは 12 番手。Q2 への進出は果たせなかった。

アタックを終えた脇阪。「朝のセッションで石浦選手の調子が良かったし、その様子を見ながら僕も手応えを得ていました。ただ、トップタイムを狙うには、あともう少し欲しいね、という話になり、予選に向けてセットを変更することになったんです。ところが、そのセットに走りを合わせ切れなかった」と話し始めた。

「アタックラップで A コーナーに入った瞬間、リアが流れてしまって…。立て直して次の周にアタックし直しました。でもやっぱり同じところでオーバーステアが出るんです。攻め過ぎて出るオーバーではなく、ステアリングを切った時点で出る症状だったので、これではタイムアップは難しいと感じました」と悔しさをにじませる。「正直、今回は Q2 に進出できるだけのポテンシャルがあったのですが、朝の走行を終えて、プラスαの部分が欲しくてセットを変更したものの、当然予選はぶっつけ本番で行かなければならない上に、オーバーが出てしまったので、対応仕切れない部分がありました。大事な予選だっただけにこのポジションは悔しいけれど、明日は追い上げを信じてやっていくしかないですね」と気持ちを入れ替え、翌日の決勝に向けての躍進を誓った。



■ 9月8日(日)

09:00-09:30 フリー走行 (09:40-10:00 サーキットサファリ)

14:00- 決勝 (6周)

【フリー走行】 12番手 / 1'46.106 (サーキットサファリ時: 7番手 / 1'45.411)

早朝から雨が降りはじめた富士スピードウェイ。午前9時からのフリー走行は完全なウェットコンディションで30分間のセッションを走るようになった。気温23度、路面温度24度の中、チームではレインタイヤの準備を進める作業を重点的に消化する。早い時点で一度赤旗中断も見られたが、その後問題なくセッションが進み、No.39 DENSO KOBELCO SC430は12番手で一旦終了。続いて行われたサファリ走行時に出走した脇阪が終盤徐々にタイムアップ。1分45秒411で7番手に着けることになった。



【決勝】 11位 / ノーポイント（シリーズポイント：37ポイント、シリーズランキング：8位）

フリー走行後には雨脚が弱まり、次第に日が差し込んできた富士スピードウェイ。サポートレースが行われる頃にはコース上も乾きはじめ、気温もぐんぐん上昇する。しかしながら上空の一部は依然として灰色の雲が残っており、またも不安定な天候での戦いが待ち受けているのではないかと懸念材料も残っている。そんな中、スタート前のウォームアップ走行では全車がスリックタイヤでコースイン。そのままダミーグリッドへと車両が勢揃いする。傍らにはレインタイヤが準備されるも、コース上は汗ばむほどの強い日差しが照りつける。気温も29度、路面温度に至っては35度まで上昇、レースウィークで最も高い数値を記録した。

No.39 DENSO KOBELCO SC430のスタートドライバーはいつも通り石浦選手が担当。12番手からクリアスタートを切り、ハイペースで周回を重ねていく。チャンスを作ってはポジションアップを目指して激しいバトルを展開。14周目、3台が一斉に並んで1コーナーに向う際、勢い余りオーバーランする姿も見られたが、引き続きバトルを見せて観客を沸かせた。

そしてレースは19周目、メインストレート上で1台の車両のタイヤがバースト。スピンし、そのままコースを横断するような形でイン側のガードレールにクラッシュ。21周目からセーフティカーが導入される。これにより、前車とのギャップが詰まり、逆転のチャンスがチームに巡ってくることに。一方、コース上では隊列が整ったことが確認され、これを受けてピットレーンオープンのボードが表示されると、一斉に各車ルーティンワークのピットインが始まる。

No.39 DENSO KOBELCO SC430も同様に石浦がピットへと戻ってくる。待ち受けるスタッフは迅速な作業で脇阪をコースへと送り出すことに成功。8番手で新たに周回を重ねていくこととなった。実質、差がない緊迫したバトルの中、脇阪は前を行く36号車のSC430を猛追。だが、27周目の1コーナーで接触、その勢いで36号車がオーバーラン、当然のことながら39号車もマシンにダメージを負うことになった。

暫くの間、そのまま8番手で周回を重ねていた脇阪だったが、この後、接触でのペナルティが科せられ、ドライブスルーペナルティの消化を求められる。当然ポジションダウンは否めず、11番手からの追いつけを始め、44周目には再び10番手へと返り咲き、そのままポイント圏内でチェッカーを迎える予定だったが…。

チェッカーまで残り僅かとなった時点で突然No.39 DENSO KOBELCO SC430がペースダウン。緊急ピットインすることに。実は先の36号車との接触により、左フロントのホイールが破損。この影響でタイヤがスローパンクチャーを引き起こしていたことが判明する。よって、フィニッシュまで残りあと僅かの時点でポイントが手からこぼれ落ちるという大変悔やまれる結果で富士の戦いを終えることになった。



いい流れを作ることなく11位でレースを終えたことに対し、脇阪は「これからというときに、自分のミスでこういう結果を招いてしまい、レクサス勢にも迷惑をかけることになりました」と残念がった。シリーズランキングの争いでは、今回高得点を取ったチームが新たに現れ、ライバルが増えることになったが、その点に関しては「まだまだチャンスはあるし、最後まで諦めずに戦う」とキッパリ。「ウェイトハンディが今までの半分となる次戦オートポリスでは久々に軽いウェイトでレースができるので、楽しみにしている」と残り2戦での反撃を約束している。

次戦は、10月5日(土)・6(日)にオートポリス(大分県日田市)で開催される。

【Photo Gallery】



